

平和の成立する場
— フィクションの用例分析 —

松尾雅嗣
広島大学平和科学研究センター

The Locus Dimension of Peace Image
— Case Study of Japanese Fictions —

Masatsugu MATSUO
Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

The research on peace image has concentrated its attention on the substance of peace. The objective of the present paper is twofold. First, it argues that there is another dimension in peace image, that is, the locus dimension, in addition to substance or value dimension. Next, it discusses the validity of the categories belonging to the locus dimension, on the basis of the samples of 'heiwa' (peace) taken from the Japanese fictions. The result shows that, as far as the Japanese peace image is concerned, there are nine locus categories: 'jinrui' (human race), 'sekai' (world), 'kuni' (country), 'shudan' (group), 'machi' (city, town), 'mura' (village), 'katei' (family), 'kojin' (individual), 'shizen' (nature).

目 次

序

- 1 平和イメージの多次元性
- 2 日本人の平和イメージにおける「平和の成立する場」
- 3 場面カテゴリーと価値カテゴリー

結び

序

平和イメージなり平和像に関する従来の研究における最大の関心事は、文化あるいは政治文化、性、社会経済的要因、年齢といった変数が、人々の平和イメージに如何なる影響を与えるか、平和イメージを如何に規定するかということであった。些か譬喩的に言うならば、文化、性といった独立変数のとる値と平和イメージという従属変数のとる値との関連を明らかにすることが、従来の平和イメージ研究の大きな関心事であったと言える。このような方法においては、当然のことながら、変数の値を名義尺度レベルであれ、何らかの形で確定ないしは推定できることが前提となる。性や文化といった独立変数に関しては、これは比較的容易である。しかし、従属変数たるべき平和イメージに関しては、ことはそれほど簡単ではない。従来の研究においては、平和イメージを幾つかのタイプに分類し、このタイプの頻度と独立変数の相関を検討するという方法が採用されている。Cooper (1965) をもって嚆矢とする研究の流れがそれである。ここで問題となるのは、「静穏」、「友好」、「和平」といった分類の妥当性もさることながら、平和イメージが、平和の内容や実質を表わす概念のみに限定されているという点である。拙稿(1983a)の調査結果に端的に示されるように、平和イメージは単に平和の内容や実質を表わす概念からのみ成立つのではなく、「平和のシンボル」や「拠り所」、平和の成立ちうる「場」といったレベルの異なる概念をも含むものである。Ehly (1972) が「能動的」——「受動的」、「関与的」——「非関

与的」という分類規準を設定したり、Hook (1979) が「平和の担い手」といった概念を導入したのもこのような平和イメージの性格を反映したものと解することができる。

このように見てくるならば、平和イメージ研究は、独立変数との関係を論ずる前に、従属変数たるべき平和イメージの内容なり構成要素を再度仔細に吟味すべき段階にあると言える。本稿は、そのような再検討の試みの一環を成すものであり、平和イメージには、「平和の実質、内容」という次元のほかに、「平和の成立しうる場」という次元があることをまず明らかにし、次いでこの次元にどのようなカテゴリーが含まれるか、「平和の実質、内容」という次元に属するカテゴリーと、それがどのような関係にあるかを、日本のフィクションにおける「平和」の用例にもとづいて明らかにしようとするものである。ただ、研究の現段階からしても、また使用したデータの量と質からしても多分に試論の性格を免れないものであることを予め断っておく。

1 平和イメージの多次元性

前述のように平和イメージは、「平和の実質、内容」という次元のみから成るものではない。この点は、拙稿(1983a)における日本人学生の平和イメージ調査の結果からも明らかである。これについては後に取上げることにして、ここでは、まず「平和の実質、内容」という従来問題とされてきたカテゴリーに関し、従来の研究を手短かに振り返ってみよう。従来の研究の中で代表的なものとして取上げるべきものはふたつある。第一は、石田雄による「平和」を意味する語の異文化間比較である。¹⁾ 石田は、古代ユダヤ教の「シャーローム」(shālōm)、ギリシャの「エイレーネ」(eirene)、ローマの「パックス」(pax)、中国、日本の、「和平」、「平和」、インドの「シャーンティ」(śānti)の意味を比較し、意味の重点が文化により異なることを明らかにしている。その際石田は、「神意・正義」、「繁栄」、「秩序」、「心の静穏」という意味の重点が置かれる4つの概念を用いているが、これらはいずれも「平和の実質、内容」という次元に属すべき概念である。

第二は、Cooper (1965) である。これを取上げるのは、以後の児童を対象と

した Ålvik (1968), Rosell (1968), Haavelsrud (1970), Ehly (1972), Hook (1979) などがいずれも Cooper の分類を基本的には踏襲しており,²⁾ その意味で以後の研究の先駆となっているからである。Cooper は, “peace” に対する児童の連想反応を「休止, 静穏」(inactivity), 「争いのないこと」(respite), 「友好的活動」(sociable activity), 「講和, 和平」(reconciliation) の 4 つに大別し,³⁾ これを分析の基礎としている。この 4 つが「平和の実質, 内容」を表わすことは明らかであろう。また方法論的観点からすれば, Cooper の枠組では平和イメージという変数はただひとつの値しか取りえない変数である。これに対し, 石田の枠組では平和イメージは, 石田自身の図式化からも明らかのように, 1 次元的是であるが, ふたつ以上の値を許容しうる, 言わば 1 次元マトリックスとして扱われている。⁴⁾ このような, 「平和の内容, 実質」という次元に議論を限定せず, 平和イメージを多次元的に把握するというのが本稿の目的である。この意味で注目すべきは, Ehly (1972) と Hook (1979) であることは既に述べた。Ehly は平和イメージが被験者である児童にとって身近であるか否かという規準を導入して, 「関与的」——「非関与的」という次元を措定している。⁵⁾ この次元は場合により後述の「場面」次元と近接する。このような平和イメージの多次元的分析に明示的な一歩を踏み出したのが Hook (1979) である。Hook は, 1973 年にインドとカナダで実施した児童を対象とする自由記述式の調査で, “Who makes peace?” という設問を与え, 「平和の作り手」の問題を提記している。⁶⁾ Hook は更に「平和が関連するレベル」という言葉で, 「平和の成立しうる場」という次元の存在を無視しえないことも指摘している。⁷⁾

以上見た如く, 平和イメージが複数の概念を同時に含みうること, 更には多元的でさえあることは, 先行の研究において, 暗示的にあるいは明示的に示されるところであるが, これを如実に示したのが筆者が 1982 年に行なった大学生を対象とする自由連想調査の結果である。⁸⁾ 「平和」という言葉に対する反応度数の大きい語を選んでグルーピングし,⁹⁾ 更に様々な「平和」の用例における意味の比較検討と併せ考えると,¹⁰⁾ 日本人学生にとっての「平和」の意味の構成要素として次のような概念が抽出される。¹¹⁾

「戦争がない」, 「核(の脅威)がない」, 「(平和に関する政治的)

争点」, 「平和の拠り所」, 「原爆被害,(がない)」, 「戦争の被害, 惨禍(がない)」, 「(平和の)シンボル」, 「(平和のための)運動」, 「穏やか, 静か」, 「争い, 事件がない」, 「自然」, 「幸福」, 「家庭」, 「世界」, 「好ましい」¹²⁾

この中で、「争点」, 「平和の拠り所」, 「シンボル」, 「運動」, 「家庭」, 「世界」は、明らかに「平和の実質, 内容」とは次元の異なる概念である。このように「平和の実質, 内容」とは異なる次元に属する概念の比重が高いことは¹³⁾ 平和イメージが決して1次元的ではないことを示すものである。その意味で、「平和の実質, 内容」が平和イメージにおける最も重要な次元であるにしても、それだけでは平和イメージの全体像を把えることは不可能である。

こう考えるならば、次の問題は、平和イメージはどのような次元から構成され、それらが全体としての平和イメージにおいてどのような重要性をもち、またどのような関係にあるかということである。これまでの議論からも明らかのように、「平和の実質, 内容」という次元が平和イメージの軸となるものであることは確かであろう。この次元を以後、「価値」次元と呼ぶことにする。¹⁴⁾ 価値次元の他にどのような次元が考えられるであろうか。Hook (1979)において「平和の作り手」や「平和の成立しうる場」という次元が提案されていることは既に述べた。このふたつをそれぞれ「主体」次元、「場面」次元と呼ぶことにしよう。前述の筆者の調査結果から例を取れば、「首相」, 「国連」, 「神」などは主体次元に属する概念であり、「家庭」, 「世界」, 「人類」などは場面次元に属する概念である。上掲の学生の反応からは、このほかにも「シンボル」, 「運動」といった次元の存在が示唆されよう。

このように平和イメージには、多くの次元が考えられるが、ここでは平和イメージの多次的分析のひとつの試みとして場面次元を取上げる。場面次元を取上げるのは、上述の学生の平和イメージの調査結果から判断して、これが価値次元に次ぐ重要性をもつと考えられるからである。場面次元は前述のように「平和の成立しうる場」を意味する次元であり、「世界」, 「家庭」といったカテゴリーが直ちに想起されよう。以下、小説を中心とする日本の文学作品における「平和」の用例をデータとして、日本人の平和イメージの場面次元にどのようなカテゴリー

が含まれるかをまず明らかにする。

尚、中村研一は、「平和」という言葉が使われる社会的文脈によって「平和」の意味を3つのレベルに分類している。「家庭生活」のレベル、「政界」のレベル、「運動」のレベルがそれである。¹⁵⁾ この分類は、ここでいう場面次元と重なり部分が多分にあるが、「平和が問題となる文脈、社会生活の局面」に関わるものであり、場面次元とは異なる。日本語の用法という観点からするならば、中村の分類はむしろ「～にとっての平和」という文脈に出現しうる概念を対象としたものである。「家庭」は確かに平和の場面そのものでもあるが、構成員にとって平和は、「生活上の望しさをあらわすシンボル」¹⁶⁾ でもある。また平和は政界あるいは政治家にとって「争点」であり、「手段」¹⁷⁾ である。これに対し、運動あるいはそれに関わる人々にとって、平和は目標であり「課題」¹⁸⁾ である。同様に語法という観点からすれば場面次元に属すべき概念は、中村の分類結果と異なり、「～の平和」と「平和な～」というふたつの環境とともに生起しうるものであることを原則とする。

2 日本人の平和イメージにおける「平和の成立する場」

「平和の成立する場」という次元、即ちここで言う場面次元にどのようなカテゴリーが含まれるかを明らかにするには多くの方法があろう。本稿で試みたのは、文学作品を中心とするフィクションにおける「平和」の用例を分析するという方法である。所謂大衆少説を中心とするフィクションを対象としたのは、社会生活、人間生活の多様な局面を対象としうるという意味で日本人一般の平和イメージに多少とも接近しうることに、用例収集の効率とによる。効率という見地のみからすれば、新聞、政治家の演説といった素材も考えられるが、筆者の乏しい経験からする限りでは、多様性一般性という点では少説のほうが望ましいと言える。但し、今回収集した用例に関して言えば、作家と作品の選定は恣意的であり、日本の少説あるいはそれを通じての日本人の意識を代表しうるものではない。しかし、多様性一般性を多少なりとも確保するため対象を文庫化されたものに限定し、しかも1作家1冊、用例は1作家につき最大3例までに限定した。このようにして収集し分析の対象とした用例の数は119、作家は63名である。詳細は末尾の付表

に示す。

用例については、用例の出現する文とその前後の1文を分析の対象とした。このとき、句点から句点までを1文とし、会話が句点で終らぬときには話者の交替をもって文の境界とした。このようにして作った「平和」の用例のサンプルが本稿で用いたデータである。以下の議論は主としてこのデータにもとづくものであり、データの質量両面からして、結論的なものではないことは勿論である。

場面カテゴリーとしてどのようなカテゴリーがあるかを明らかにするため、用例を分析し、上述の学生を対象とした調査の結果をも加味して、予備的に次の12のカテゴリーを抽出した。

- <人 類> 人間, 人類
- <世 界>
- < 国 > 国, 国家, 国内
- <集 団> 集団, 組織, 仲間
- < 町 > 町, 街, 都市, 都
- < 村 > 村, 山里, 里
- <家 庭> 家庭, 家族, 夫婦, 親子
- <個 人> 個人, 心, 精神
- <世・時代> 世, 世の中, 治世, 時代
- <光景・様子> 眺め, 様子, 雰囲気
- <自 然> 自然, 田園, 山川草木
- <日常生活> 生活, 日々, 日常

<人類>から<個人>に至るカテゴリーは階層関係を想定することができるし、また前節の末尾で言及したふたつの文脈のいずれにも出現しうる。これに対し、<世・時代>以下の4つのカテゴリーは些か異質であり、語法的にも「平和な～」という言い方はできるが、「～の平和」という言い方はできない。従って、論理構成としては、<世・時代>以下のカテゴリーを除いたほうが明快である。しかし、用例を見る限り、分析の論理的単位としてはともかく、日本人の平和に対す

る発想の一環として欠くことができないものとも考えられる。また後掲表1にも見られるように、この4個のカテゴリーは無視しえぬ数の用例に出現している。

以下、本節と次節で、この12のカテゴリーに関し、このような問題をも含め場面カテゴリーとしての妥当性を検討する。妥当性の判断の規準となるのは、概念としての独立性と平和イメージ研究における有効性、特に価値カテゴリー間の識別、判別力というふたつの規準である。本節で独立性の問題を検討し、次節で有効性の問題を検討する。このため、サンプルとして収集した「平和」の用例を次のような手順で処理した。

まず、各用例につきこの12のカテゴリーのうちどれが出現しているかを確定した。これは筆者の判断で行ない、所謂コーディングの信頼性に関するチェックは行なっていない。またこのとき、従来の研究と異なり、ひとつの用例に複数のカテゴリーが出現しうるものとした。これは、問題の12個のカテゴリーの独立性を検討するために必要であり、また理論的にもふたつの場面カテゴリーにおける平和が対比されている用例を扱うためには不可欠の要請である。

次節で論ずる価値カテゴリーについても、これと同時に同様の方法で処理した。この結果、各用例は複数個の価値カテゴリー（のコード）と複数個の場面カテゴリー（のコード）を与えられることになる。勿論、価値カテゴリー、場面カテゴリーの一方あるいは両方を欠く用例も存在しうる。これをコンピュータに入力し、まず場面カテゴリーについて出現度数を求めた。結果を表1に示す。本稿における筆者の立場からする偏りを考慮に入れたとしても、全体としてこれだけの数の場面カテゴリーが出現していることは、平和イメージにおける場面次元の存在を示すひとつの証左と言えよう。

表1 12カテゴリーの出現度数

カテゴリー	出現度数	百分比*
人 類	5	4.2
世 界	9	7.5
国	18	15.1
集 団	9	7.5
町	8	6.7
村	20	16.8
家 庭	26	21.8
個 人	16	13.4
世・時代	17	14.2
光景・様子	14	11.7
自 然	21	17.6
日常生活	23	19.3

* 用例総数119に対する

次に各カテゴリーの概念としての独立性を検討する手段として、各カテゴリー間の相関の度合いを求めた。ここで相関の指標として用いたのは、ピアソンの相関係数ではなく、共出現係数Cである。¹⁹⁾ カテゴリーXとYの出現度数をそれぞれ F_X 、 F_Y とし、XとYが共に出現する用例の数、即ちXとYの共出現度数を C_{XY} とすると、XとYの共出現係数Cは次式で与えられる。²⁰⁾

$$C = 2 \sum_{i=m}^n \left(\frac{F_X! (N-F_X)! F_Y! (N-F_Y)!}{i! (F_X-i)! (F_Y-i)! (N-F_X-F_Y+i)! N!} \right) - 1$$

但し、 $n = \max(m, C_{XY}-1)$

N = 用例総数

$m = \max(0, F_X+F_Y-N)$

12のカテゴリーの共出現係数を表2に示す。因みに、共出現係数Cは対称である。

表2 12のカテゴリーの共出現係数

	人類	世界	国	集団	町	村	家庭	個人	世・時代	光景・様子	自然	日常生活
人類		0.34	-0.13	0.34	0.40	-0.21	-0.43	-0.04	0.20	0.05	-0.25	-0.33
世界	0.34		0.18	-0.03	0.04	-0.64	-0.80	-0.48	0.76	-0.37	-0.67	-0.73
国	-0.13	0.18		-0.56	-0.48	0.29	-0.61	-0.88	0.82	-0.82	0.20	0.80
集団	0.34	-0.03	-0.56		0.04	-0.64	-0.80	-0.48	-0.52	-0.37	-0.67	0.52
町	0.40	0.04	-0.48	0.04		-0.56	-0.74	-0.39	-0.44	-0.28	0.14	-0.66
村	-0.21	-0.64	0.29	-0.64	-0.56		-0.73	-0.91	-0.15	0.14	0.99	-0.59
家庭	-0.43	-0.80	-0.61	-0.80	-0.74	-0.73		0.03	-0.97	-0.72	-0.94	0.99
個人	-0.04	-0.48	-0.88	-0.48	-0.39	-0.91	0.03		-0.85	-0.76	-0.64	0.25
世・時代	0.20	0.767	0.82	-0.52	-0.44	-0.15	-0.97	-0.85		-0.79	-0.69	-0.96
光景・様子	0.05	-0.37	-0.82	-0.37	0.28	0.14	-0.72	-0.76	-0.79		0.96	-0.91
自然	-0.25	-0.67	0.20	-0.67	0.14	0.99	-0.94	-0.64	-0.69	0.96		-0.65
日常生活	-0.33	-0.73	0.80	0.52	-0.66	-0.59	0.99	0.25	-0.96	-0.91	-0.65	

場面次元に属するカテゴリーは、定義からしても相互に排反的であるか、無関係であることが望ましい。共出現係数Cは、 $C \geq 0.9$ であれば有意水準0.05で正

の相関があるが、²¹⁾ <人類>から<個人>に至る8つのカテゴリー相互については、表2に見られるようにこのように高い正の相関を示す組合せはない。問題となるのは、先にも挙げた<世・時代>から<日常生活>に至るカテゴリーである。有意水準0.1、即ち $C \geq 0.8$ となる正の相関を抜き出すと次のようになる。

<世・時代>と<国>	…………	0.82
<光景・様子>と<自然>	…………	0.96
<自然>と<村>	…………	0.99
<日常生活>と<国>	…………	0.80
<日常生活>と<家庭>	…………	0.99

この中で、<日常生活>と<国>の組合せを除けば、他の組合せにおける高い相関は、内容的に十分納得できるものである。このことは逆に言えば、<世・時代>、<光景・様子>、<自然>、<日常生活>という4つのカテゴリーについては、場面次元のカテゴリーとしての独立性、妥当性に問題があるということにはほかならない。実際ここに掲げた組合せからも明らかなように、正の相関は一般にはふたつのカテゴリーの意味の重複、近縁を意味する。しかしながら、共出現係数はその名の示すとおり、ある言語単位内における共出現にもとづく指標であり、正の相関の高さが、ふたつのカテゴリーが同一の用例内でしばしば対比されていることを意味する場合もある。後者のケースも念頭に置いて、正の相関が高い組合せを中心に各カテゴリーの独立性を別の角度から検討してみる。

このためには用例を個別的に吟味するという方法もあるが、ここではより一般的な方法を用いる。そのひとつは、任意の組合せについて、他の10のカテゴリーとの相関パターンの類似性を検討するという方法である。具体的には任意の組合せについて他の10のカテゴリーを変数とするユークリッド距離を求めればよい。表2の行列の要素を $C(i, j)$ とすれば、 x 番目のカテゴリーと y 番目のカテゴリーのユークリッド距離 $E(x, y)$ は次式で与えられる。

$$E(x, y) = \sum_{k=1, k \neq i, k \neq j}^{12} \{ C(i, k) - C(j, k) \}^2$$

ユークリッド距離は対称、即ち $E(x, y) = E(y, x)$ であり、また定義からして $E(x, x) = 0$ である。任意のふたつのカテゴリーについて、他の10のカテゴリーとの相関のパターンが近ければユークリッド距離は小さくなり、逆に相関のパターンが異なれば異なるほどユークリッド距離は大きくなる。例えば、ふたつのカテゴリー X, Y について、 X が他のカテゴリー Z_1, Z_2, Z_3 と正の相関を示し、 Y が Z_1, Z_2, Z_3 と負の相関を示すなら、 X と Y のユークリッド距離 $E(X, Y)$ は大きくなるはずである。従って、ユークリッド距離はここでは、ふたつのカテゴリーについて、他の10のカテゴリーとの共出現係数という相関指標で測った関係が似ているか似ていないかを示す。そして、ユークリッド距離が小さいとき、即ち他のカテゴリーとの関係が近いとき、ふたつのカテゴリーは、その限りにおいて排他性、独立性が薄いと解釈できる。しかも問題のふたつのカテゴリー間の正の相関が高いときには、排他性、独立性は一層低くなると言える。

表2にもとづいてユークリッド距離を算出した結果を表3に示す。これにもとづいて、相関の高い組合せについて検討してみよう。まず〈世・時代〉と〈国〉であるが、ユークリッド距離で見ると、〈世・時代〉は〈国〉よりも〈世界〉に近い。また〈世・時代〉を〈国〉に含めて計算すると、〈国〉と〈世界〉の共

表3 12のカテゴリー間のユークリッド距離

	人類	世界	国	集団	町	村	家庭	個人	世・時代	光景・様子	自然	日常生活
人 類	0.00	1.70	5.21	2.56	1.42	5.60	8.58	5.48	4.77	5.45	5.99	7.83
世 界	1.70	0.00	5.13	3.74	2.57	5.10	8.83	6.12	1.53	7.08	7.34	8.61
国	5.21	5.13	0.00	4.43	5.65	5.12	7.59	6.10	4.66	6.55	9.34	10.57
集 団	2.56	3.74	4.43	0.00	2.09	6.33	2.68	1.73	5.55	5.83	7.2	7.50
町	1.42	2.57	5.65	2.09	0.00	3.14	6.68	3.44	4.03	2.05	5.99	7.68
村	5.60	5.10	5.12	6.33	3.14	0.00	9.45	6.71	6.32	2.05	1.58	10.39
家 庭	8.58	8.83	7.59	2.68	6.68	9.45	0.00	1.23	10.02	9.48	10.49	3.94
個 人	5.48	6.12	6.10	1.73	3.44	6.71	1.23	0.00	7.53	5.62	9.90	5.10
世・時代	4.77	1.53	4.66	5.55	4.03	6.32	10.02	7.53	0.00	6.91	7.49	8.89
光景・様子	5.45	7.08	6.55	5.83	2.05	2.05	9.48	5.62	6.91	0.00	2.35	10.93
自 然	5.99	7.34	9.34	7.21	5.99	1.58	10.49	9.90	7.49	2.35	0.00	13.00
日常生活	7.83	8.61	10.57	7.50	7.68	10.39	3.94	5.10	8.89	10.93	13.00	0.00

出現係数は0.91, ユークリッド距離は2.64となる。これは, <世・時代>, <国>, <世界>が, 日本人の平和イメージにおいてきわめて近い一面をもつことを示すものと解することができる。

<光景・様子>, <自然>, <村>の3つのカテゴリーの間にも似たような関係がある。即ち, <光景・様子>は<自然>と相関が高く, 他のカテゴリーとの相関パターンも近い。他方, <自然>は<村>と相関が高く, 相関パターンも近い。また<光景・様子>は<町>, <村>とも相関パターンが近い。<光景・様子>と<自然>, <村>, <町>との関係は, <光景・様子>を後の3つのカテゴリーの付随的属性と考えることにより解決すべきであるかもしれない。とすれば, <光景・様子>は場面カテゴリーとしては不要になり, <村>と<自然>の関係を考えればよいことになる。

<日常生活>は<家庭>, <国>との相関が高いが, 他のカテゴリーとの相関パターンはいずれともそれほど近くない。しかし, 共出現係数, ユークリッド距離を比較し, 意味を考慮するならば, <家庭>に含めることも可能である。

以上, 共出現係数とユークリッド距離を用いて12の場面カテゴリーの妥当性, 特に独立性の問題を検討した。その結果, <世・時代>など独立性に問題のあるカテゴリーが幾つか現われた。しかし, カテゴリーの妥当性は本節で論じた場面カテゴリー相互の関係だけでは判断しきれない。それ故, 次節では角度を変え場面カテゴリーと他の次元に属するカテゴリーとの関係から, この点を検討する。

3 場面カテゴリーと価値カテゴリー

本節では場面カテゴリーと, 平和イメージの別の次元である価値次元に属するカテゴリーの関係から, 場面カテゴリーの妥当性を検討する。第1節で論じた従来の研究の成果と学生の平和イメージ調査にもとづいて, 「平和の内容, 実質」を表わすカテゴリーとして, 次の13の価値カテゴリーを設定する。

<核(がない)> (核戦争, 原爆被害を含む)

<戦争(がない)> (戦争被害も含む)

<争い・事件(がない)>

<穏やかさ> 穏やか, 静か

- <安心> 安心, 安全, 満足
- <好ましさ>
- <友愛>
- <幸福>
- <繁栄>
- <正義>
- <秩序>
- <神意>
- <希望> 希望, 理想, 夢

データ, コーディングについては既に前節に述べたとおりである。この13の価値カテゴリーについて出現度数を求めると、<核>, <正義>, <秩序>, <神意>は, サンプル数の関係もあり, 出現度数が少な過ぎるので以後の分析からは割愛する。他の9個の価値カテゴリーの出現度数と相互の共出現係数を, それぞれ表4, 表5に示す。価値カテゴリー間では、<戦争>と<好ましさ>, <安心>と<希望>のように正の相関が高いものもある

表4 価値カテゴリー出現度数

	出現度数*	百分比**
戦争	30	25.2
争い・事件	39	32.7
穏やかさ	22	18.4
安心	20	16.8
好ましさ	7	5.8
友愛	11	9.2
幸福	11	9.2
繁栄	14	11.7
希望	7	5.8

* 用例数
** 対用例総数

表5 価値カテゴリーの相関

	戦争	争い・事件	穏やかさ	安心	好ましさ	友愛	幸福	繁栄	希望
戦争		-0.44	-0.91	-0.61	0.86	-0.93	-0.11	-0.48	0.51
争い・事件	-0.44		-0.60	-0.40	-0.46	-0.85	-0.53	-0.43	-0.88
穏やかさ	-0.91	-0.60		-0.06	-0.54	-0.81	-0.28	-0.90	-0.54
安心	-0.61	-0.40	-0.06		-0.46	0.45	-0.16	0.14	0.97
好ましさ	0.86	-0.46	-0.54	-0.46		0.00	0.00	0.61	0.29
友愛	-0.93	-0.85	-0.81	0.45	0.00		0.46	-0.52	0.00
幸福	-0.11	-0.53	-0.28	-0.16	0.00	0.46		-0.52	0.00
繁栄	-0.48	0.43	-0.90	0.14	0.61	-0.52	-0.52		-0.18
希望	-0.51	-0.88	-0.54	0.97	0.29	0.00	0.00	-0.18	

が、ここでは特に問題にしないで、いずれも平和イメージの分析において意味のあるカテゴリーであると仮定しておく。

この9個の価値カテゴリーと、元の12個の場面カテゴリーとの共出現係数を求めた結果を表6に示す。表6に与えられたデータからは、個々の場面カテゴリーは特定の価値カテゴリーと強い結び付きを示すことが見てとれるが、この点は後に論ずる。ここでは、まず、価値カテゴリーに対する場面カテゴリー間の相関パターンの類似性を検討する。前節と同様ユークリッド距離を用いるが、表6の行列の要素を $C(i, j)$ とすると、 x 番目の場面カテゴリーと y 番目の場面カテゴリーのユークリッド距離 $E(x, y)$ は次式で与えられる。

$$E(x, y) = \sum_{k=1}^9 (C(x, k) - C(y, k))^2$$

価値カテゴリーとの相関にもとづく場面カテゴリー間のユークリッド距離を表7に示す。

表6 場面カテゴリーと価値カテゴリーの相関

	戦争	争い・事件	穏やかさ	安心	好ましさ	友愛	幸福	繁栄	希望
人類	-0.54	-0.73	-0.29	0.60	0.46	0.22	0.98	0.05	0.46
世界	0.18	-0.95	-0.70	0.65	0.13	-0.19	-0.19	-0.37	0.82
国	0.91	0.61	-0.38	0.29	-0.38	-0.04	-0.69	0.92	0.42
集団	-0.43	-0.23	0.88	-0.64	0.13	0.60	-0.19	-0.37	0.13
町	0.95	-0.92	-0.63	-0.56	0.21	-0.10	-0.10	0.52	0.21
村	-0.96	0.95	-0.85	-0.96	0.33	-0.76	-0.16	0.97	-0.46
家庭	-0.99	-0.65	0.66	0.92	0.04	-0.48	0.60	0.27	0.04
個人	-0.98	-0.99	0.90	-0.59	-0.29	0.09	0.66	-0.76	-0.29
世・時代	0.93	0.40	-0.95	0.37	-0.34	-0.66	-0.66	0.77	-0.34
光景・様子	0.01	-0.47	0.00	-0.87	-0.18	0.23	-0.52	-0.68	-0.18
自然	0.11	0.26	0.88	-0.82	-0.50	-0.78	-0.22	0.96	-0.50
日常生活	-0.98	-0.38	0.81	0.33	-0.57	0.28	0.28	-0.60	-0.57

表7 価値カテゴリーとの相関にもとづく
場面カテゴリー間のユークリッド距離

	人類	世界	国	集団	町	村	家庭	個人	世・時代	光景・様子	自然	日常生活
人 類	0.00	2.68	8.32	5.07	5.33	9.71	2.24	4.99	9.18	6.21	9.89	4.63
世 界	2.68	0.00	5.55	6.15	3.25	11.32	5.11	7.80	5.83	4.53	10.38	6.97
国	8.32	5.55	0.00	7.62	4.03	7.47	9.27	13.71	1.36	6.52	5.21	10.34
集 団	5.07	6.15	7.62	0.00	5.97	8.80	5.18	2.37	10.16	1.61	5.03	2.62
町	5.33	3.25	4.03	5.97	0.00	8.45	8.44	8.82	4.00	3.60	6.12	9.64
村	9.71	11.32	7.47	8.80	8.45	0.00	9.85	11.76	6.41	7.85	5.32	10.75
家 庭	2.24	5.11	9.27	5.18	8.44	9.85	0.00	4.06	9.84	7.43	6.93	2.62
個 人	4.99	7.80	13.71	2.37	8.84	11.76	4.06	0.00	14.57	3.58	7.38	1.58
世・時代	9.18	5.83	1.36	10.16	4.00	6.41	9.84	14.57	0.00	7.00	5.75	11.10
光景・様子	6.21	4.53	6.52	1.61	3.60	7.85	7.43	3.58	7.00	0.00	5.32	4.03
自 然	9.89	10.38	5.21	5.03	6.12	5.32	6.93	7.38	5.75	5.32	0.00	6.74
日常生活	4.63	6.97	10.34	2.62	9.64	10.75	2.62	1.58	11.10	4.03	6.74	0.00

表7から場面カテゴリーとの相関パターンが特に近い組合せを抜き出すと次のようになる。

<人 類>と<世 界>	2.68
<人 類>と<家 庭>	2.24
<国>と<世・時代>	1.36
<集 団>と<個 人>	2.37
<集 団>と<光景・様子>	1.61
<集 団>と<日常生活>	2.62
<家 庭>と<日常生活>	2.62
<個 人>と<日常生活>	1.58

この中で問題になるのは前節でも独立性を問題にした<世・時代>、<光景・様子>、<日常生活>の3カテゴリーであろう。

次に、個々の場面カテゴリーが価値カテゴリー間の対比、弁別にどの程度寄与しているかを考えてみる。今 i 番目の場面カテゴリーと j 番目の価値カテゴリー、 k 番目の価値カテゴリーそれぞれの共出現係数をそれぞれ $C(i, j)$ 、 $C(i, k)$ とする。 $C(i, j)$ 、 $C(i, k)$ の値は表6に与えられている。任意の価値カテ

リーの組合せについて、任意の場面カテゴリーとの共出現係数の差、即ち $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の差が大きいとき、問題のふたつの価値カテゴリーはこの場面において対比されていると考えることができる。逆に言えば、問題の場面カテゴリーは、このときふたつの価値カテゴリーの対比、対立に寄与していると言うことができる。 $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の差がどの程度であればふたつの価値カテゴリーの対比、対立が言えるかは明らかでない。しかし、ここでは

$$0 \leq |C(i, j) - C(i, k)| \leq 2^{22}$$

であることを考慮して、差が1.5以上であれば差当り対比ありと見做した。表8は、表6のデータにもとづいて $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の差を求め、差が1.5以上となるものを示したものであり、場面カテゴリーがどのような価値カテゴリーの対比に寄与しているかを示したものである。

表8 価値カテゴリーの対比に対する場面カテゴリーの寄与

	人類	世界	国	集団	町	村	家庭	個人	世・時代	光景・様子	自然	日常生活
戦 争-争い・事件					○	○						
戦 争-穏やかさ		○			○		○	○	○			○
戦 争-安心		○			○		○					
戦 争-友愛									○			
戦 争-幸福	○		○				○	○	○			
戦 争-繁栄						○						
戦 争-希望		○										
争い・事件-穏やかさ						○		○				
争い・事件-安心						○	○					
争い・事件-友愛						○						
争い・事件-幸福	○							○				
穏やかさ-安心				○							○	
穏やかさ-友愛											○	
穏やかさ-繁栄						○		○	○			
穏やかさ-希望		○										
安心-繁栄						○					○	
友愛-繁栄						○					○	
幸福-繁栄			○									

○印は、 $|C(i, j) - C(i, k)| \geq 1.5$ となるものを示す。

表8から判断する限り、〈光景・様子〉、〈集団〉、〈日常生活〉の3つの場面カテゴリーは価値カテゴリーの対比、弁別に対する寄与の度合いが小さい。〈集団〉、〈日常生活〉については、このふたつのカテゴリーがなくても〈穏やかさ〉—〈安心〉、〈戦争〉—〈穏やかさ〉という対比は他の場面カテゴリーにより可能である。この意味で、〈光景・様子〉、〈日常生活〉、〈集団〉は場面カテゴリーとしての有効性を欠くと言えよう。

また、表6と表8を比較検討すれば、場面カテゴリーは、価値カテゴリーとの正負の相関が高いとき、そのカテゴリーと他の価値カテゴリーとの対比に寄与することが明らかである。例えば、〈人類〉は〈幸福〉との相関が高く、〈幸福〉と〈戦争〉、〈争い・事件〉との対比に寄与しているのがその一例である。この意味で価値カテゴリーとの相関の低い〈光景・様子〉が、価値カテゴリー間の対比に寄与しないのは当然である。

場面カテゴリーと価値カテゴリーの関係についてより重要なのは、他のどの場面カテゴリーについても、表6から明らかのように、高い正負の相関を示す価値カテゴリーが存在するということである。このような場面カテゴリーと価値カテゴリーの対応が1対1もしくはそれに近いものであるならば、それはそれとして重要かつ興味ある問題ではあるが、場面と価値というふたつの次元を設定する理由は消滅する。しかし、実際には、表6に見られるとおり、このような対応は存在しない。これは、個々の場面カテゴリーについてはともかく、場面という次元の存在理由を消極的に裏付けるものと言えよう。個々のカテゴリーの関係も含め場面カテゴリーと価値カテゴリーの関係もより詳細に論ずべきであるが、本稿の範囲を越えるので、稿を改めて論ずる。

結 び

本稿では平和イメージに「平和の成立する場」という次元の存在することを明らかにし、次いで従来の研究とフィクションにおける「平和」の用例の分析にもとづき、〈人類〉、〈世界〉、〈国〉、〈集団〉、〈町〉、〈村〉、〈家庭〉、〈個人〉、〈世・時代〉、〈光景・様子〉、〈自然〉、〈日常生活〉という12個の場面カテゴリーを設定した。次にこの12の場面カテゴリーについて、相互の相

関、他の場面カテゴリーとの相関パターンの類似性、価値カテゴリーとの相関及び相関パターンの類似性、価値カテゴリー相互の対比弁別への寄与の度合いという観点から、その場面カテゴリーとしての妥当性、特に独立性を検討した。

この結果を整理すると次のようになる。〈光景・様子〉は〈自然〉と相関が高く、相関パターンも近い。また、価値カテゴリー間の対比、弁別にも寄与しないし、概念的にも既述のように他の場面カテゴリーの付随的属性という性格が強い。従って、〈町〉、〈村〉、〈集団〉などと近接する側面をもつにもかかわらず、〈光景・様子〉は〈自然〉に含めるのが妥当である。また、〈世・時代〉は〈国〉と相関が高く、価値カテゴリーとの相関パターンも近い。〈世界〉との関係が近い場合もあるが、〈世・時代〉は〈国〉に含めることができよう。次に〈日常生活〉は〈家庭〉との相関が高く、価値カテゴリーの相関パターンも近い。また、価値カテゴリーの対比弁別にも寄与しない。〈集団〉などとの相関パターンが近いという事実もあるが、〈日常生活〉は〈家庭〉に含めることができよう。ここでひとつのカテゴリーを他のより重要と思われるカテゴリーに含めるという表現を用いたが、これは原則であって、実際のサンプルのコーディングにあたっては、例えば〈世・時代〉というカテゴリーを与えられていたサンプルに、〈国〉ではなく〈世界〉というカテゴリーを与える場合もあることは言うまでもない。

以上の考察から、平和イメージの場面次元に属するカテゴリーとしては次の9カテゴリーを措定することができる。

- 〈人 類〉
- 〈世 界〉
- 〈 国 〉
- 〈集 団〉
- 〈 町 〉
- 〈 村 〉
- 〈家 庭〉
- 〈個 人〉
- 〈自 然〉

言うまでもなく、このカテゴリーは限られたデータにもとづく分析の結果導き出されたものであり、結論的なものでは決していない。第一に方法論的観点からすれば、場面カテゴリー相互の関係と価値カテゴリーと相関だけにもとづく分析とカテゴリーの独立性、必要性という見地からの分析からのみ得られたものである。従って、必要条件はある程度満たすとしても、十分条件を満たすとは、少なくとも論理的には言えない。第二に、国際比較、異文化間比較、あるいは世代間比較の規準たりうるかどうか、また逆に特定の限定された集団の平和イメージ分析に必要な十分であるか、などの問題もある。第三に、平和イメージの他の次元とどのような関係にあるかも将来の検討課題である。

註

- 1) 石田(1968) pp. 18 - 37, Ishida(1969)。
- 2) 松尾(1983b) pp. 117 - 122 も参照。
- 3) Cooper (1965) p. 4。
- 4) 石田・前掲書 p. 35。
- 5) Ehly 自身の用語は “personal” と “impersonal”。 Ehly (1972) pp. 42 - 43, 56。
- 6) Hook (1979) p. 85, p. 101 註1。「平和の作り手、主体」(agent)と「平和の実質、内容」というふたつの次元の関連については、インドとカナダにおける1983～84年の調査データにもとづく Glenn D. Hook と筆者による共同研究が進行中である。
- 7) Hook・前掲論文, p. 100。
- 8) 調査の詳細については、松尾(1983a) pp. 7 - 13 参照。
- 9) 同上第3節。
- 10) 同上第4節, 第5節。
- 11) 同上 p. 37。
- 12) これらの概念の詳細については、同上第4節, 第5節参照。
- 13) 同上 p. 17, 表4。
- 14) Glenn D. Hook の示唆による。
- 15) 中村(1984) p. 77。
- 16) 同上。
- 17) 同上。
- 18) 同上。

- 19) 松尾(1981)。
 20) 同上 p. 134。
 21) 同上 p. 135。
 22) $-1 \leq C(i, j), C(i, k) \leq 1$ 。松尾(1981) p. 135。

引用文献

- Ålvik, Trond (1968) 'The Development of Views on Conflict, War and Peace among School Children: A Norwegian Case Study' *Journal of Peace Research*, 5 (2) 171-195.
- Cooper, Peter (1965) 'The Development of the Concept of War' *Journal of Peace Research*, 2 (1) 1-17.
- Ehly, J.A.E.A (1972) *Images of War and Peace: A Cross-national Study of Children's Orientations to Conflict and Cooperation in the Global System* Ph. D. Dissertation, Northwestern University.
- Heavelsrud, Magnus (1970) 'Views on War and Peace among Students in West Berlin Public Schools' *Journal of Peace Research*, 7 (2) 99-120.
- Hook, Glenn D. (1979) 'Orientation to Peace among Canadian and Indian Children' *Peace Research in Japan, 1978-79* 85-102.
- 石田雄(1968) 『平和の政治学』 東京：岩波書店
- Ishida, Takeshi (1969) 'Beyond the Traditional Concept of Peace in Different Cultures' *Journal of Peace Research*, 6 (2). 133-144.
- 松尾雅嗣(1981) 「言語要素間の共出現の指標について—自然言語データ分析の一手法として」『広島平和科学』4 101-143
 (1983a) 「連想調査による「平和」の意味分析」広島大学平和科学研究センター研究報告シリーズ№8
 (1983b) 「平和イメージにおける性差」『広島平和科学』6 115-136
- 中村研一(1984) 「報告」『世界』, 1984(1) 76-83
- Rossell, Leif (1968) 'Children's Views of War and Peace' *Journal of Peace Research*, 5 (3) 269-276.

付表 用例出所一覧

分析のサンプルとして用いた用例の出所を著者の五十音順に次の形式で示す。
 著者, 文庫版書名(文庫版出版社, 文庫版初版年) 頁

- 赤川次郎 「幽霊候補生」(文春, 1982) 66
- 阿佐田哲也 「あゝ勝負師」(角川, 1979) 152
- 有吉佐和子 「華岡清州の妻」(新潮, 1970) 5
- 鮎川 哲也 「戌神はなにを見たか」(講談社, 1983) 120
- 生島 治郎 「さすらいの狼」(集英社, 1983) 162, 346
- 池波正太郎 「鬼平犯科帳1」(文春, 1974) 9
- 石川 達三 「蒼氓」(新潮, 1951) 70, 128
- 石沢英太郎 「牟田刑事官事件簿」(講談社, 1982) 28, 132
- 井上ひさし 「偽原始人」(新潮, 1979) 102
- 井上 靖 「ある偽作家の生涯」(新潮, 1956) 129
- 井伏 鱒二 「黒い雨」(新潮, 1970) 165
- 内田 百閒 「第二阿房列車」(旺文社, 1979) 93
- 大岡 昇平 「浮虜記」(新潮, 1967) 29, 285, 321
- 加賀 乙彦 「頭医者青春記」(講談社, 1983) 102
- 梶井基次郎 「檸檬」(新潮, 1967) 26
- 梶山 秀之 「黒の試走車」(角川, 1973) 143
- かんべむさし 「スパイの内幕」(徳間, 1984) 23, 140, 242
- 北 杜夫 「へそのない本」(新潮, 1976) 117, 160, 201
- 日下 圭史 「蝶たちは今…」(講談社, 1978) 56
- 草野 唯雄 「爆殺予告」(集英社, 1981) 271
- 小林 信彦 「オヨヨ島の冒険」(角川, 1974) 144
- 小松 左京 「宇宙漂流」(角川, 1976) 247, 248,
- 五味 康祐 「秘剣・柳生連他斎」(新潮, 1958) 50
- 斎藤 栄 「死角の時刻表」(集英社, 1982) 12
- 西東 登 「クロコダイルの涙」(集英社, 1981) 60, 97, 261
- 堺屋 太一 「油断!」(文春, 1978) 10, 62, 63
- 坂口 安吾 「夜長姫と耳男」(角川, 1972) 56
- 笹沢 佐保 「赦免花は散った」(富士見, 1981) 118, 125, 126
- 佐藤 愛子 「ソクラテスの妻」(中公, 1974) 40, 41, 163
- 椎名 麟三 「重き流れの中に」(新潮, 1950) 36, 74, 92
- 柴田錬三郎 「赤い影法師」(新潮, 1953) 8, 296, 300
- 清水 一行 「殺人念書— 離れの葬列」(角川, 1981) 95, 106
- 城山 三郎 「黄金の日々」(新潮, 1982) 7, 20, 198
- 瀬戸内晴美 「いずこより」(新潮, 1974) 132, 194
- 曾野 綾子 「黎明」(角川, 1971) 80, 163
- 高木 彬光 「二幕半の殺人」(角川, 1976) 145, 271

- 武田 泰淳 「ひかりごけ」(新潮, 1964) 157
 太宰 治 「斜陽」(角川, 1950) 29 , 170
 立原 正秋 「血と砂」(文春, 1983) 9 , 23 , 43
 田辺 聖子 「鬼たちの声」(文春, 1980) 8
 つかこうへい 「戦争で死ねなかったお父さんのために」(新潮, 1979) 98 , 246 , 323
 辻 邦生 「安土往還記」(角川, 1972) 181
 筒井 康隆 「おれに関する噂」(新潮, 1978) 139 , 143 , 150
 戸川猪佐武 「小説吉田学校 第四部金脈政変」(角川, 1981) 226 , 253 , 272
 中島 敦 「李陵・山月記」(新潮, 1969) 104 , 110
 仁木 悦子 「枯葉色の街で」(角川, 1982) 74
 沼 正三 「家畜人ヤブー」(角川, 1972) 210 , 531
 野坂 昭如 「ゲリラの群れ」(角川, 1970) 297 , 319 , 332
 林 芙美子 「浮雲」(新潮, 1953) 146 , 194 , 277
 原 民喜 「夏の花・心願の国」(新潮, 1962) 134 , 162
 半村 良 「下町探偵局PARTI」(角川, 1984) 113
 福永 武彦 「海市」(新潮, 1981) 49 , 74
 星 新一 「ちぐはぐな部品」(角川, 1972) 179 , 185 , 187
 松本 清張 「影の地帯」(角川, 1972) 146 , 180
 三浦 綾子 「石ころのうた」(角川, 1979) 47 , 72
 水上 勉 「京の川」(新潮, 1973) 34 , 34 , 68
 三好 徹 「閃光の遺産」(文春, 1983) 19
 安岡章太郎 「犬をえらばば」(新潮, 1974) 165
 山口 瞳 「新入社員諸君」(角川, 1973) 180
 山田風太郎 「信玄忍法帖」(角川, 1975) 5 , 34
 結城 昌治 「白昼堂々」(角川, 1971) 39 , 264
 横溝 正史 「金田一耕助の冒険」(角川, 1976) 121
 横光 利一 「機械・春は馬車に乗って」(新潮, 1969) 40 , 84